

日々の聖句

12月 降誕



聖書を読む方法には、聖書全体の通読、章と節を追いながらの精読、また、主題にそって学ぶなどの方法があります。また、主題にそって学ぶなどの方法があります。さらに、教会暦にそって聖書を読む方法もあります。

教会暦は「ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていない」（第二テモテ2・8新改訳第二版）との御言葉に基づいて、「クリスマス」と「イースター」を軸に組み立てられています。クリスマス四週前の日曜日から「アドベント」を始め、クリスマスの後はバプテスマから始まるキリストの公生涯をたどります。そしてイースター前の週を「受難週」、または「聖週間」と呼んでキリストのエルサレムでの最後の一週を覚えて過ごします。この聖週間の前の四十日が「レント」（四旬節）で、キリストの受難を覚える期間となっています。

イースターの後四十日して「キリストの昇天日」を、その後さらに十日して「ペンテコステ」（聖霊降臨日）を祝います。一年を神の救いの歴史を圧縮したものと考へ、父なる神のみこころから出て、キリストによって成就し、聖霊によって私たちのものとなった偉大な救いの御業を毎年くりかえし覚えるのが教会暦です。

『日々の聖句』ではこの教会暦にそって聖書を読み進んでいきます。一般のカレンダーは1月から新しい年が始まりますが、教会暦は12月から始まります。『日々の聖句』を使つてのデボーションも12月から始まります。時計が12時から始まるように、個人のデボーションのサイクルを『日々の聖句』とともに12月から始めましょう。 <http://penguinclub.net/mokusou> に『日々の聖句』のウェブページも準備されています。ぜひコメントを書き込んでください。

それによって、すでにお受けになった教えが確かであることを、あなたによく分かっていただきたいと思います。(4)

「すでにお受けになった教え」というところは、バプテスマを受けるための準備教育を意味する言葉が使われています。ルカがこの福音書を献呈した「テオフィロ」は回心したばかりの人で、バプテスマに向けて準備をしていたようです。ルカはテオフィロが口頭で聞いた福音を文書で確かめることができるようにとこれを著しましたが、そのおかげで、今日の私たちも一世紀の人々と同じ福音を聞くことができます。

当時、書物を作るには大きな労力と財力が必要でしたが、テオフィロがルカが福音書を書き著すのを支援したと思われます。「テオフィロ」という名には「神を愛する人」という意味がありま

す。神が遣わしてくださった救い主をもっと知りたいと願って福音書を待ち望み、それが完成するために支援を惜しまなかった「神を愛する人」がいたので、この福音書ができたのです。もちろん、聖書のすべては神の靈感によって生み出され、神の力に守られて今日まで伝えられてきたのですが、同時に、聖書は様々な歴史的状況の中で書かれ、守られ、次の世代に受け継がれてきました。そして、ルカの福音書の成立のために「神を愛する人」テオフィロが大きな貢献をしたように、かつても、今も、神の言葉が広まっていくためには、神の言葉を語る人々ばかりでなく、それを求め、御言葉の働きを支援する「神を愛する人」が必要なのです。

祈り 主よ。私たちに福音を遣してくれた人々のゆえに、あなたに感謝します。

しかし、彼らには子がいなかった。エリサベツが不妊だったからである。また、二人ともすでに年をとっていた。(7)

当時のユダヤでは子を生まない女性は蔑まれ、自らも引け目を感じていました。「不妊」が罪に對する罰であると考えられることもありましたが、しかし、「二人とも神の前に正しい人で、主のすべての命令と掟を落度なく行っていた」(6)という言葉は、エリサベツの「不妊」が罪に對する罰ではないことを明らかにしています。神は、深いみこころをもつて、エリサベツの不妊を年齢を重ねるまで癒やすことをなさらなかったのです。

ルカの福音書の最初の登場人物は子どももない高齢の夫婦でした。このことは、旧約にある神の民の物語が、子どももないアブラム、サライ夫妻から始まっているのと對をなしています。神

が世界の祝福と救いのために最初に用いたのは、元氣な若者ではなく、弱さを持った初老の人だったのです。

聖書は言います。「私たちは、この宝を土の器の中に入れていきます。それは、この測り知れない力が神のものであつて、私たちから出たものではないことが明らかになるためです。」(第二コリント4・7)神は人を用いてご自分の御業を押し進められますが、しばしば、何らかの弱さを持つた人々を用います。それは、ご自分の御業が人間の力によつてなされたものではないことを示すためです。自分は「土の器」のようなものに過ぎないと考える人々をこそ選んで、ご自分の御業を成し遂げてくださるのです。

祈り 主よ。私たちの弱さをも用いて御業をなしてくださいることを感謝します。

その子はあなたにとって、あふれるばかりの喜びとなり、多くの人もその誕生を喜びます。(14)

エリサベツが男の子を産むという知らせは、聖所で祭司の務めをしていたザカリヤに告げられました。長い間子どもがなかった夫婦に子どもが与えられるという知らせはプライベートなことです。それがザカリヤに告げられるにしても、何も聖所でなくても、また、香をたくという聖なる務めの最中でなくてもよかったですように思われます。しかし、主はその時、その場所を選ばれました。それは、生まれてくる男の子が、ザカリヤとエリサベツにとって喜びとなるだけでなく、イスラエル全体の喜びとなるためでした。

「ザカリヤ」という名には「主、覚え給う」という意味があります。主なる神はザカリヤ夫妻の

祈りを覚えていてくださいましたが、それと共に、イスラエルの回復とメシアの到来を待ち望む人々の祈りを覚えていてくださったのです。ザカリヤに喜びを与える主は、ザカリヤの子を通してメシアの到来という、すべての民のためのさらに大きな喜びを与えてくださるのです。ですから、ザカリヤがイスラエルを代表して香をたく時、つまり、イスラエルのために祈る時、子どもの誕生が知らされたのは、それにふさわしいことだったのです。「主、覚え給う。」聖所から立ち上る香とともに主のもとにささげられた祈りはむなしくはなかったのです。主はそれを覚え、イスラエルに、また、全世界に大きな喜びを与えようとしておられるのです。

祈り 主よ。私たちを、あなたがくださる喜びを受け取るまで、祈り続ける者としてください。

イスラエルの子らの多くを、彼らの神である主に立ち返らせませす。(15)

ザカリヤ夫妻の間に生まれる子には、主からの特別な使命が与えられていました。ザカリヤ夫妻はその子を「わが子」として育てるだけでなく、「主のしもべ」として育て、主にささげなければなりません。 「子供」という漢字には、子は親の「供」にすぎないという意味合いがありますが、子は決して親の付属品ではないし、親が思い通りにできるものでもありません。子の人生は、親の夢を託すためではなく、主の使命を果たすためにあります。子が主に従い、主からの使命を果たせるように備えるのが信仰を持つ親の務めです。それは親子の情愛を断ち切ることでなく、むしろ、親子が同じように主のしもべとして生きることによって、より一層の敬愛で結ば

れるようになることでしょう。

ザカリヤ夫妻に生まれる子はマラキ4・5に「見よ。わたしは、主の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす」とあるように、「エリヤの霊と力」を持ち、人々を主に立ち返らせる働きをします。エリヤは、バアルを崇拜していたイスラエルの人々に、天からの火によって主こそまことの神であることを示しましたが、ザカリヤ夫妻の子もまた、預言の言葉をもって、人々の心をまことの神に向けさせるのです。人々にまことの神を示す。この使命は、ザカリヤの子ばかりでなく、すべての信仰者とその子らに与えられた使命です。

祈り 主よ。子どもたちが主から与えられた使命を知り、それに従うことができるよう、彼らを導き育てることができませすように。

その時が来れば実現する私のことばを、あなたが信じなかつたからです。(20)

ザカリヤは御使いが語った言葉を信じませんでした。そのため彼は口がきけなくなりました。神の言葉を受け入れない時、自分の言葉を失うということは、今でも起こっていると思います。今日、なんと多くの人が自分の言葉を持つことなく、時代の風潮や人々の噂などに踊らされ、好き勝手なことを言い、その言葉をクルクルと変えていることでしょうか。マスコミを通しての言葉をオウムがえしに口から発しているだけなのです。ものごとの事実を見極めた上で言葉を語り、語った言葉の通りに生きるということがなくなつてきたのは、神の言葉に聞くことをしなくなつたからだと思います。

赤ん坊は、自分では言葉を話せないときでも、

大人たちが自分に語りかけてくれる言葉を聞いてそれを蓄えています。やがて言葉を使うことができるようになったとき、蓄えられた言葉が役に立つのです。神の子らも同じです。御言葉の乳、御言葉の糧(第一ペテロ2・2、エレミヤ15・16)を得て育つことによつて、必要な時に必要な言葉を語ることができるようになります。

また、主の言葉が必ず実現すると信じて、それを受け入れ、それに従うなら、そのことによつて主を証しし、人々を信仰に導いたり、信仰を励ましたりすることができるようになります。借り物の言葉ではなく、自分自身の言葉で真理を語るこ

とができるようになるのです。
祈り 主よ。御言葉に聞き、信じ、従うことによつて、私自身の「信仰の言葉」を語ることができるようになってください。

主は今このようにして私に目を留め、人々の間から私の恥を取り除いてくださいました。(24)

「目を留める」という言葉は、主が人に特別な恵み、あわれみを注いでくださる時に使われます。この言葉が最初に出てくるのは創世記4・4で、「主はアベルとそのささげ物に目を留められた」とあります。イエスの雛型であるボアズはルツに「目を留め」ました(ルツ2・19)。イエスは取税所に座っていたレビに「目を留め」ています(ルカ5・27)。

神が人に目を留めてくださるのであれば、人もまた神に目を留めなければなりません。「彼らは主のなさることに目を留めず、御手のわざを見もしない」(イザヤ5・12)ということであつてはならないのです。「その日、人は自分を造つた方

に目を留め、その目はイスラエルの聖なる方を見る」(イザヤ17・7)ことを覚えましょう。

主は「わたしが目を留める者、それは、貧しい者、霊の碎かれた者、わたしのことばにおののく者だ」(イザヤ66・2)と言われました。哀歌5・1に「主よ。私たちに起こったことを心に留め、私たちの汚名に目を留めて、よく見てください」という祈りがありますが、エリサベツもそのように祈っていたのでしょうか。自らの貧しさを認め、ひたすらに主を求める者が、主に目を留めていただけるのです。主は私たちの苦しみに「目を留めて」くださる方(詩篇106・4)だからです。

祈り 主よ。私はあなたの戒めに思いを潜め、あなたの道に私の目を留めます。私の行く道で私を教え、諭してください。私に目を留め 助言を与えてください。(詩篇119・15、32・8)

恐れることはありません、マリア。あなたは神から恵みを受けたのです。(30)

御使いはマリアに「おめでどう、恵まれた方。

主があなたとともにおられます」と言いました。

「おめでどう」という言葉は、他のところで「おはよう」、「こんばんは」、「万歳」などという

挨拶の言葉として訳されていますが、直訳すれば

「喜べ」です。マリアには、御使いの挨拶は「喜べ」と聞こえたことでしょう。

「主があなたとともにおられます」も、ユダヤの人々の間でかわされた挨拶のことばでした(ルツ2・4)、マリアはこのことばにひどく戸惑っています(29)。それは、マリアが御使いの言葉に挨拶以上の意味を感じとったからでした。

実際、御使いがマリアに告げた「主がともにおられる」という言葉は、主が主の民に臨在を示して

くださるという一般的な言葉ではなく、御子がマリアの胎内に宿るといふ具体的なことを告げるものでした。御使いがマリアを「恵まれた方」と呼んだのは、マリアが主の母として選ばれたからでした。御使いは、マリアにその選びを告げ、その選びを「喜べ」と言ったのです。

主は弟子たちに「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい」(ルカ10・20)と言われました。御子を産み、育てるといふ特別な恵みはマリアだけに与えられたものですが、すべての信仰者にもまた、どれだけ喜んで足らないような救いの恵みが与えられているのです。御使いが私たちにも「喜べ」と語りかけていることを忘れないようにしましょう。

祈り 主よ。私たちが、あなたの恵みを日々にご信仰者となれますよう、助けてください。

その名をイエスとつけなさい。(31)

古代では、父親が生まれた子に名を与えました。ところが、御使いは母親であるマリヤに「その名をイエスとつけなさい」と命じています。それは、イエスの本来の父が神だからです。

とはいえ、御使いはヨセフにも現われ、ヨセフにも「その名をイエスとつけなさい」(マタイ 1・21)と命じました。ユダヤでは八日目の割礼の時に命名する慣わしがあり(ルカ1・59)、その時、「イエス」と命名したのはヨセフでした(ルカ2・21)。御使いが告げた「神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります」(32)という言葉は、イエスがヨセフの子となることによって成就したのです。

かつて主がダビデに「あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえまでも確かなものと

なり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ」

(第二サムエル7・16)と約束されたように、イエスは「ダビデの子」としてその王座に着きます。しかし、それはダビデ王朝を再興し、ユダヤの国を独立させるためではなく、それ以上のもの、つまり、神の国を建て、御国の王として支配するためでした。

マリヤもヨセフも、この時点では、「イエス」という名が持っている意味をすべて理解したわけではありませんでした。普段わが子を「イエス」と呼んでいましたが、時には立ち止まって、その名の意味を考えることもあったでしょう。私たちも、イエスの御名を呼ぶたびに、その意味を考えたいと思います。

祈り 主よ。あなたの名を呼ぶとき、その意味を深く考える者としてください。

神にとって不可能なことは何もありません。(37)

御使いはマリアに「神にとってすべては可能だ」とは言わず「神にとって不可能は何もない」と言いました。「不可能」は否定の言葉ですが、否定の言葉を否定することによって、神の全能を力強く言い表したのです。

同じ言葉は創世記18・14にあります。主は、アブラハムに、「主にとって不可能なことがあるだろうか。：サラには男の子が生まれている」と言われました。創世記ではイサクの誕生に関して「主にとって不可能なことがあるだろうか」と言われていますので、「御子を宿す」という御使いの告知を聞いたマリアは、自分とサラとを重ね合わせて考えたかもしれません。

エレミヤ書にはこう書かれています。「ああ、

神、主よ、ご覧ください。あなたは大きいな力と、伸ばされた御腕をもって天と地を造られました。あなたにとって不可能なことは一つもありません。」(エレミヤ32・17) 「見よ。わたしはすべての肉なる者の神、主である。わたしにとって不可能なことが一つでもあろうか。」(エレミヤ32・27)

私たちのまわりには「こんなことは不可能だ」という声がひしめいています。また、神のお力に関して、また信仰について、否定的な思いが私たちの思いの中から湧いてくることもあるでしょう。そんなとき、主の言葉を聞きましょう。主の言葉だけが、否定的な言葉を否定する力を持っているからです。

祈り 主よ。あなたに不可能なことは何もありません。とを確信させてください。

あなたのおことばどおり、この身になりますように。(38)

古代では、王が臣下に詔(みことのり)を伝える時、その言葉は絶対で、それを拒否するならば、死や役職追放などの刑罰が待っていました。ザカリヤへの主の言葉は、いままで不妊であったエリサベツに子が与えられるという喜ばしいものでした。進んで主の言葉を受け入れて当然なのに、ザカリヤはそれを信ぜず、受け入れようとしませんでした。それでザカリヤは一時的に主の懲らしめを受けたのです。

ザカリヤへの主の言葉にくらべ、マリアへの主の言葉は、とても彼女に受け入れられるようなものではありませんでした。主の言葉に従えば、当然、ヨセフとの婚約は解消され、未婚の母として人々から斥けられるようになるでしょう。「御使

いが私に告げた主の言葉によって私に子が宿ったのです」とマリアが言ったところで、誰がそれを信じるでしょうか。しかし、マリアは、主の言葉を、臣下が王の詔を受け取るように、うやうやしく、また、確かな決意をもつて受け取りました。マリアは「あなたのおことばどおり、この身になりますように」と言つて、文字通り、身も心も、主に献げました。

ローマ12・1に「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい」とありますが、この言葉は、ご自身をささげた主イエスと主の母マリアによって、すでに実行されています。私たちはその足跡に従い、模範に倣うのです。

祈り 主よ。あなたとあなたの母に倣い、自らを献げることができますように。

主によつて語られたことは必ず実現すると信じ
た人は、幸いです。(45)

イエスが人々を教えておられたとき、一人の女性
性が、イエスに向かつて「あなたを宿した胎、あ
なたが吸つた乳房は幸いです」(ルカ 11・27)と
言いました。彼女もまた母親であつて、イエスの
ような素晴らしい息子を持つことが母親にとつて
どんなに誇らしいことであるかをよく知つてい
て、そう言つたのでしよう。それに対してイエス
は、「幸いなのは、むしろ神のことばを聞いてそ
れを守る人たちです」(同 11・28)と答えておら
れます。神の言葉に聞き、それに従うことは自慢
の息子を持つこと以上の幸いであると言われたの
です。

イエスはご自分の母を自慢するようなことをし
ませんでしたが、常に母を敬つていました。それ

は母マリアが、じつに「神のことばを聞いてそれ
を守る人」だつたからでした。マリアは、御使い
が語つた「神にとつて不可能なことは何もありま
せん」という言葉を信じ、「おことばどおり、こ
の身になりますように」と言つて、神の言葉に服
従しました。エリサベツは「主によつて語られた
ことは必ず実現すると信じた人は、幸いです」と
言つて、マリアの神の言葉に対する信仰を証しし
ています。

主が母を敬つたように、キリスト者も母マリア
に倣おうとします。私たちは多くの点でマリアに
倣うことができず、とりわけ「神のことばを
聞いてそれを守る」ことにおいて、マリアを模範
としたいと思ひます。

祈り 主よ。私たちをも御言葉への信頼と服従が
もたらす幸いに与らせてください。

今から後、どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう。(48)

マリアは御使いによつて「恵まれた方」(ルカ 1・28)と呼ばれ、「神から恵みを受けた」(30)人でした。エリサベツもマリアを「女の中で最も祝福された方」(42)と呼び、「主によつて語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです」(45)と言っています。マリア自身も「今から後、どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう」と言いました。「恵まれた」、「祝福された」、また、「幸いな」と訳されている言葉の原語はそれぞれ違っていますが、どれも、主の恵みに生かされている幸いを指しています。マリアは自分に与えられた幸いを主の言葉どおりに受け入れて、それを喜んでいきます。

多くの場合、人は本当の自分を見ていません。

ある人は自分を自分以上に見て優越感をいだき、ある人は自分を自分以下に見て劣等感を持ちます。どちらも虚像を見ているのであって、実像ではありません。神が「あなたはこのような者だ」と言われる言葉を素直に受け入れるのであれば、本当の自分を知ることができないのです。

マリアが「今から後、どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう」と言ったのは、決して思い上がった言葉ではありません。マリアは自分が主の「はしため」(原意「女奴隸」)であることを知っていました。しかし、同時に、主の恵みを受けている自分を、主の言葉どおりに受け入れ、主の恵みをほめたたえたのです。

祈り 主よ。私たちもまた、あなたの恵みに生かされている存在です。その恵みを通して自分を見ることができるよう、助けてください。

主は：権力のある者を王位から引き降ろし、低い者を高く引き上げられました。(52)

マリアの賛歌はサムエルの母ハンナの祈りに似ています。ハンナが「勇士が弓を砕かれ、弱い者が力を帯びます。満ち足りていた者がパンのために雇われ、飢えていた者に、飢えることがなくなります。不妊の女が七人の子を産み、子だくさんの女が、打ちしおれてしまします」(第一サムエル 2・4～5)と言ったように、マリアも「主は：権力のある者を王位から引き降ろし、低い者を高く引き上げられました。飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせずに追い返されました」と言っています。「女、子ども」と呼んで弱者をしえたげてきた、世の権力者が、最高の権力を持つておられるお方によって斥けられ、しえたげられてきた人々が高められる時が来る、

「どんでん返し」の救いが実現するというのです。神の救いは常に「逆転の救い」です。ハンナもマリアも、弱い者を強め、低い者を高め、貧しい者を富ませ、飢えた者を満ち足らせてくださる主の力とあわれみとをほめたたえました。

力ある者が主の力を現すのではなく、しばしば、主は、力のない者を用いて、ご自分の力を現されます。詩篇 8・2に「幼子たち、乳飲み子たちの口を通して、あなたは御力を打ち立てられました。あなたに敵対する者に応えるため、復讐する敵を鎮めるために」とある通りです。力ある者よりも力のない者のほうが主の力をより深く知り、高らかに賛美することができます。祈り 主よ。自分の弱さ、足らなさに嘆くのではなく、低い者を高め、乏しい者を満ちたしてください。あなたのお力を讃える者としてください。

すると彼は書き板を持って来させて、「その子の名はヨハネ」と書いたので、人々はみな驚いた。(63)

エリサベツが産んだ子に名前をつける日がやってきました。父親であるザカリヤに命名権があったのですが、彼はまだ口がきけないでいました。それで親族一同が相談して父親と同じ名、「ザカリヤ」にしようということになりましたが、エリサベツは「ヨハネ」でなければならぬと主張しました。それで、ザカリヤに確認すると、ザカリヤは書き板に「その子の名はヨハネ」と書きました。ザカリヤが、御使いによって伝えられた主の言葉に従った時、ザカリヤは再びものが言えるようになりました。ザカリヤに対する懲らしめが解かれたのです。

主は言われます。「わたしは愛する者をみな、

叱ったり懲らしめたりする。だから熱心になって悔い改めなさい。」(黙示録3・19) 主の懲らしめはすべて主の愛から出ています。ザカリヤは主の言葉に対する不信仰のゆえに口がきけなくなつたのですが、ザカリヤはその期間、「聞く」ことに集中し、主の言葉に従う訓練を受け、それによつて御言葉に対する信仰が回復しました。それで、我が子の命名の時、御使いによつて告げられた主の言葉に従うことができたのです。

箴言3・11、12に「わが子よ、主の懲らしめを拒むな。その叱責を嫌うな。父がいとしい子を叱るように、主は愛する者を叱る」とあります。懲らしめが父なる神の愛から出て、私たちに回復をもたらすことを覚えていきましょう。

祈り 主よ。私たちの不信仰を癒やし、あなたの愛を確信する信仰へと導いてください。

さて、父親のザカリヤは聖霊に満たされて預言した。(67)

降誕の記事には聖霊の働きが幾度も記されています。バプテスマのヨハネは胎内にいるときから「聖霊に満たされ」(ルカ1・15)、「エリヤの霊」(同1・17)を受けるようになります。マリアに「聖霊が：臨み」(同1・35)御子が産まれ、マリアの訪問を受けたエリサベツは「聖霊に満たされ」ました(同1・41)。マリアは「私の霊は私の救い主である神をたたえます」(同1・47)と言つて主を賛美しましたが、彼女の賛美は彼女の霊と共にあつた聖霊の働きによるものでした。懲らしめを解かれたザカリヤは「聖霊に満たされ」(同1・67)しました。

神は三位一体のお方であり、その救いのみわざは父が計画し、御子によつて成し遂げられ、聖霊

によつて私たちのものとなります。御子イエス・キリストは人となり、「人の間に」住んでくださいましたが、聖霊は、さらに、「人の中に」住んで、人を神の命にあずからせ、神のものとしてくださるのです。

「三位一体」は神の存在の奥義であり、そのすべてを知ることにはできませんが、父・御子・聖霊の神が総掛かりで私たちに救いを提供しておられることは理解することができます。そして、そのことを理解する時、主がどんなにか私たちを愛しておられ、私たちの救いを望んでおられるかが分かるのです。クリスマスのは出来事は、三位一体の神の救いの御業であり、その愛の現われです。

祈り 主よ。あなたが聖霊によつて注いでくださっている愛を、聖霊によつて知り、聖霊によつてあなたを礼拝する者としてください。

罪の赦しによる救いについて、神の民に、知識を与えるからである。(77)

ルカ1・68～75でザカリヤは「救いの角」(ルカ1・69)、つまり、救い主について預言し、「救い主は、アブラハムに、また、ダビデに誓われたとおりに、この世においでになる」と言つて、旧約の成就を告げました。

ザカリヤの預言の後半は「幼子よ」という言葉で始まっていて、バプテスマのヨハネが「いと高き方の預言者と呼ばれ」、「主の御前を先立つて行き、その道を備え」、「罪の赦しによる救いについて、神の民に、知識を与える」者となると言っています。ここには、救いの中心が「罪の赦し」であることが示されています。

紀元前五八六年にエルサレムが陥落して以来、ユダヤの人々はペルシャ、エジプト、シリアなど

に支配され、キリストの時代にはローマに支配されてきました。それで、人々は「救い主」というと、真つ先に、外国の支配を斥け、独立したユダヤの国を建国してくれるリーダーのことを思い描きました。しかし、神が遣わされる救い主は、人々が期待する政治的、軍事的な救い主ではありませんでした。外国の支配からの解放以上に罪からの解放、つまり「罪の赦し」をもたらし、神と人とを結びつける、靈的な救い主でした。それで、ザカリヤの子ヨハネに託された使命もまた靈的、信仰的なもので、バプテスマのヨハネは人々を救い主による罪の赦しへと導くために、罪の悔い改めを宣べ伝えたのです。

祈り 主よ。「救い主」と呼ぶことが何を意味しているのかを教え、あなたの救いを正しく知らせることができるよう、私たちを導いてください。

アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリスト：（1）

ルカはその福音書でイエスを「マリアの子」として紹介しましたが、マタイは「アブラハムの子」、また「ダビデの子」として紹介しています。マタイがイエスの系図をアブラハムから始めているのは、「地のすべての部族は、あなたによつて祝福される」（創世記12・3）というアブラハムに与えられた約束が、イエスによつて成就されたからです。ガラテヤ3・7と14は、アブラハムが信仰によつて義と認められたように、信仰によつて生きる者はたとえ異邦人であっても「アブラハムの子」となり、アブラハムに約束された祝福を受け継ぐことができると教えています。異邦人キリスト者もイエスによつて、「アブラハムの子」とされ、神の民の信仰の資産を受け継ぐの

です。系図の中に「ラハブ」や「ルツ」という異邦人女性の名があるのは、異邦人もまた、神の民に加えられることをあらかじめ示しているように思われます。

マタイはユダヤの人々のために福音書を書いたので、降誕の記事の最初に系図を置き、イエスを「アブラハムの子」、また「ダビデの子」として紹介したと言われています。ユダヤ人の読者は系図を注意深く読み、イエスが救い主であることを知ったことでしょうが、イエス・キリストを信じる異邦人もまた、キリストによつて神の民とされ、キリストの系図に関わる者とされたことを学ぶことができるのです。

祈り 主よ。あなたを信じる信仰によつて、あなたの父祖たちの系図につながるものとされたことを感謝します。

バビロン捕囚のころ、ヨシヤがエコンヤとその兄弟たちを生んだ。(11)

アブラハムからダビデに至る系図には、「ダビデの子」として生まれる救い主への希望がありましたが、ダビデ以降の系図には、その希望が薄れていくようなことが物語られています。ソロモンの時代にダビデの王国は栄えましたが、その子レハブアムるとき、王国は分裂し、ダビデの子孫に残されたのはユダ族とベニヤミン族だけでした。「バビロン捕囚のころ」(11)という言葉があるように、ヨシヤ王の子どもたちはバビロンに連れ去られ、ダビデ王朝は終わりを告げました。

では、それで救い主の約束は反故になったのでしょうか。いいえ、木が幹から切り倒されても、その根株から若枝が生え出るように、「ダビデの子」である救い主を生み出すと、主は約束されま

した(イザヤ11・1)。最近、庭の木を切ってもらい、その切り株も処理してもらったのですが、しばらくすると、地面に残っている根からどんどん枝が生えてきました。それを切り取るたびに私は「エツサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ」との御言葉を思い起こしています。

エレミヤ29・11に「あなたがたのために立てている計画：それは：あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ」とあります。人の目には、何の希望も見えないような時でも、主は、見えないところで将来と希望を準備してくださっています。信仰者は御言葉によってその希望に生かされて歩むことができるのです。

祈り 主よ。どんな時でも御言葉によって望みを持つことをさらに教えてください。

バビロン捕囚の後、エコンヤがシエアルティエルを生み…(12)

ヨシヤには三人の子があり、長男のエホアハズが王位を継ぎましたが、エジプトに連れ去られたため次男のエホヤキムが代わって王となりました。エホヤキムがバビロンに連れ去られ、その子エホヤキンが18歳で王となりましたが、わずか三ヶ月で彼もバビロンに連れていかれました。それでヨシヤの三男ゼデキヤが代わって王となりました。エコンヤとは若くしてバビロンに連れていかれたエホヤキンのことです。ダビデの子孫は、バビロンで囚人だったのです。

エコンヤの孫ゼルバベルはエルサレムに帰ってきて、エルサレムを再建しました。彼はダビデの子孫でしたが、帰国して王となったのではなく、総督として派遣されたペルシヤの官吏のひとりで

しかありませんでした。

ゼルバベル以降の人々は、名の知られた人々ではありません。ローマがユダヤを支配する前、ユダヤには百年ほど半自治の期間があったのですが、その指導者はダビデの子孫ではありませんでした。その後ヘロデ大王が「ユダヤの王」となりますが、彼はダビデの子孫でないばかりか、ユダヤ人ですらありませんでした。彼は「王」の称号をローマから賄賂で手に入れたのです。ダビデの子孫は過去のものとして埋もれていました。主イエスはすべてに勝る名をお持ちであるのに、名も無き者たちの中に生まれました。それは救いが、人からではなく、主から来ることを物語っています。

祈り 主よ。あなたは人の名によってではなく、ご自分の御名によって私たちを救われました。

マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。(21)

御使いはヨセフにも現われ、マリアの子に「イエス」と名付けるよう命じました。この名は、ヘブライ語で「ヨシユア」で、「主、救いたもう」という意味があります。御使いは「この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです」と言つて、その名の意味を告げ、イエスによる救いが「罪からの救い」であることを明らかにしました。それはザカリヤが預言した「罪の赦しによる救い」(ルカー1・77)を指しています。

聖書は、北王国イスラエルが滅びたのは「エジプトの王ファラオの支配下から解放した自分たちの神、主に対して罪を犯した」(第二列王記17・7)からだと言っています。彼らは「主の掟と、

彼らの先祖たちと結ばれた主の契約と、彼らに与えられた主の警告を蔑み、…主が倣ってはならないと命じられた、周囲の異邦の民に倣って歩んだ」(同17・15)のです。それは、南王国ユダも同じで、聖書は、「ユダも、彼らの神、主の命令を守らず、イスラエルが取り入れた風習にしたがって歩んだ」(同17・19)と言っています。

ダビデの王国の滅亡はその罪のためでした。したがって、「ダビデの子」はその罪からの救い主でなければなりません。ユダヤの人々を政治的、軍事的に救うことは人間の力でも可能でしょう。しかし、その罪を赦し、罪から救うことは、神でなければできないことです。イエスは人々が期待した以上の救い主であったのです。

祈り 主よ。あなたが罪の赦しをもたらす救い主であることを感謝します。

そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。(1)

ローマでは「住民登録」は現住所で行われました。しかし、ユダヤでは家系ごとに登録する方式をとっていたので、総督もユダヤの人々には、その慣わしに従って、それぞれが故郷の町に帰って住民登録を行うようにしたのでしよう。しかし、この住民登録はローマが租税や徴兵のためにおこなったものであり、ユダヤの人々がローマの支配に服していることを物語るもので、それは人々にとって屈辱以外の何者でもありませんでした。

イエスの名が住民登録に記されたかどうかは分かりませんが、父ヨセフの名が書類に記された以上、その子イエスもまたローマの支配のもとに置かれたこととなります。「大いなる者」「いと高き方の子」であり、「ダビデの王位」に就く者で

あり(ルカ1・32)、「聖なる者」、「神の子」と呼ばれる(同 1・35)お方が、ローマの属国の民のひとりに数えられたことになるのです。

こうした箇所を読むとき、この世の権力が勝ち誇っているように見えます。しかし、ローマが行った住民登録もまた、主なる神の救いの計画の中で用いられたのです。この住民登録がこの時に行われたため、ナザレにいたヨセフがダビデの町ベツレヘムに行き、マリアがそこでイエスを産むことになりました。そして、救い主がダビデの町で生まれるという預言(ミカ5・2)が成就したのです。

祈り 主よ。この世の権力がすべてを支配しているように思われる時でも、あなたは主権をもって世界を導いておられます。私たちにそのことを確信させてください。

恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。(10)

「恐れることはありません。」この言葉はザカリヤに(ルカ1・13)、マリアに(同1・30)、ヨセフに(マタイ1・20)、そして羊飼いたちに語られています(ルカ2・10)。私たちの日々には常に不安があり、恐れがあります。しかし、主は常に「恐れるな」と語りかけ、神の民を励まし、力づけてくれます。「大きな喜びを告げ知らせます」と言って、「恐れ」に替えて「喜び」を与えてくださるのです。

その「喜びの知らせ」とは「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました」(10)というものです。古代には王室に世継ぎが生まれた時、その誕生は国中に告げ知ら

され、同時に恩赦や免税がなされ、贈り物が分配されました。王子誕生の知らせは「福音」と呼ばれました。この箇所はイエス・キリストについての最初の福音が書かれています。

御使いは、救い主が家畜小屋の飼葉桶に寝かせられていると告げました。それは羊飼いたちのため「しるし」となりました。もし、救い主が王宮に生まれていたら、羊飼いたちは生涯その顔を見ることなどできなかつたからです。家畜小屋も飼葉桶も羊飼いにとっては、慣れた場所、自分たちの領域でした。救い主が自らを貧しくして、羊飼いたちの領域の中に来てくださったので、彼らは救い主を礼拝することができたのです。

祈り 主よ。私たちがあなたを見出すことができするため、私たちのただなかに来てくださったことを感謝します。

いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。(14)

以前いた教会のすぐ近くにあるビルディングの屋上には、クリスマスが近づくと “PEACE ON EARTH” という文字が掲げられ、それは夜も明るく輝いていました。「地に平和。」それは誰もが願うことで、この言葉が高々と掲げられていることに文句を言う人は誰もありませんでした。しかし、もし聖書の言葉どおりに “GLORY TO GOD” という言葉を掲げたらどうでしょうか。無神論協会からクレームがつくことでしょうか。クリスマスに使われる言葉、「平和」、「希望」、「喜び」、「愛」などは誰もが使うのですが、「キリストにある希望」、「聖霊による喜び」、「神の愛」などと言おうものなら、たちまち反対の声が

沸き起こるでしょう。「平和」、「希望」、「喜び」、また「愛」という言葉はいいが、それが神に、キリストに関連づけられる時、人々はそれに反対するのです。

しかし、「神に栄光」と「地に平和」はひとつのもので切り離すことはできません。神に栄光を帰すことなしに地に平和は来ることがなく、キリストによらなければ希望はなく、聖霊がくださるのでなければ私たちは本当の喜びを知ることがなく、神の愛以外に、純粋で、変わらず、いつまでも続く愛はありません。「クリスマス」は「キリストのミサ」です。私たちの救い主となって生まれてくださった、主であるキリストへの礼拝なしに、クリスマスの喜びはないのです。

祈り 主よ。平和の君であるあなたを覚え、「神に栄光」と賛美する私たちとしてください。

さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。(15)

御使いの知らせを聞いた羊飼いたちは、みな揃ってベツレヘムの町に行き、家畜小屋を歩き巡って、飼葉桶に寝ている赤ん坊を捜し当てました。彼らは御使いたちから告げられた通りのことを見届けてから、「神をあがめ、賛美しながら帰って行」きました(ルカ2・20)。

飼葉桶の回りに寄り集まって、生まれたばかりの赤ん坊を覗き込む羊飼いたちの顔には、驚きと喜びがありました。家畜小屋は、新生児にとってはまったく好ましくない環境であり、礼拝の場所としてもふさわしくないと考えていたが、御子がそこにおられることによって、そこは栄光と賛美に満たされた聖所となったのです。

礼拝とは、キリストについて何かを学ぶだけのものではありません。キリストの降誕について、私たちは毎年12月になると繰り返し聞かされ、多くの知識を持っています。しかし、知識はあっても礼拝から遠ざかるなら、私たちに聞かされているクリスマスが出来事が御言葉の通りであり、キリストが私たちの生活と人生の真ん中におられるという事実を「見届ける」ことなく終わってしまいます。礼拝とは、主が送ってくださった救い主を、主が成し遂げてくださった救いの御業を「見届ける」ことです。そして、そのようにキリストを礼拝する時、私たちは「神をあがめ、賛美しながら帰って行」くことができます。

祈り 主よ。私たちがキリストへの礼拝をささげることなくクリスマスが終わることがありませんように。

しかしマリアは、これらのごことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。(19)

マリアは御使いの挨拶を聞いたとき、その言葉に戸惑いながらも、「これはいったい何のあいさつかと考え込」みました(ルカ1・29)。「あなた自身もって、男の子を産みます」と告げられた時も、冷静に「どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんのに」と言いました(同1・34)。マリアは神の言葉を聞いて、それを正しく受けとめることができた人でした。出産直後でも、彼女は羊飼いたちが語る言葉にしっかりと耳を傾け、聞いたことを「心に納めて、思いを巡らして」いました。

彼女は神の御子を宿しただけでなく、神の言葉をその心に宿したのです。そして、御子を産んだばかりでなく、神の言葉がもたらす信仰とその実

をも生み出したのです。マリアは神の言葉を心に宿すことができたからこそ、永遠の神の「ことば」である御子をその身に宿すことができたと言つてよいでしょう。

詩篇1・2は「主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ人」は「幸い」であると言つていますが、「口ずさむ」は「思い巡らす」とも訳すことができます。マリアは「主によつて語られたことは必ず実現すると信じる」幸いを得ましたが(ルカ1・45)、それは、主が語られた言葉を心に蓄え、思い巡らすことができたからでした。このような幸いを、クリスマスの日にごそ体験したいと思えます。

祈り 主よ。御言葉を心に宿し、思い巡らすことにより、この日、人となられた「ことば」を私たちの内に宿すことができますように。

初めにことばがあった。(1)

イエスの降誕の物語を、ルカはマリアから始め、マタイはアブラハムから始めましたが、ヨハネはさらにさかのぼって、永遠の初めから始めています。ヨハネの福音書の最初の言葉は「初めに」ですが、これは創世記の書き出しの言葉、「はじめに神が天と地を創造された」を意識して書かれています。しかし、ヨハネ1・1の「初め」は創世記1・1の「はじめ」よりもさらに時間をさかのぼり、世界が創造される以前の「初め」、つまり永遠の先を指しています。時間の中に生きる私たち被造物は、時間を超えた永遠の世界を想像することすらできませんが、聖書は「とこしえからとこしえまで、あなたは神です」(詩篇90・2)と言って、神を「永遠の神」(イザヤ40・28)として描いています。

父のひとり子として永遠の初めから神と共におられた御子なる神が人となって世に來られた。それがクリスマス・メッセージです。御子がマリアの胎に宿られたときから、永遠の神が時間の中に入って來られたのです。聖書が「マリアは月が満ちて、男子の初子を産んだ」(ルカ2・6)と言うように、御子は私たちと変わらない限りある人生の一日目を始めたのです。御子は、そのことによつて父のみこころのうちにあつた救いの計画を、ご自分の生涯の日々の中で実行に移していかれました(ガラテヤ4・4、エペソ1・10)。そして、御子イエスは、ご自分が限りある人間の日々の中に来られることによつて、人々に永遠の世界への扉を開いてくださったのです。

祈り 主よ。私たちに永遠の命を与え、永遠の住いに導いてくださることを感謝します。

この方にはいのちがあつた。このいのちは人の光であつた。(4)

イエス・キリストは「ことば」と呼ばれています。これはギリシャ語で「ロゴス」と言い、ギリシャ哲学では「ロゴス」は「原理」や「理念」を言い表すのにこの言葉を使っています。この世界にはさまざまな現象があつて、それらは常に移り変わっていく。だが、互いに関連を持っている。

世界には、そうした種々の現象や運動を統合し、調和させているものがあるはずだと、哲学者たちは考えました。そして、世界の統一原理を「ロゴス」と名付けたのです。

この世界に普遍的な原理が働いていることは誰もが認めるもので、古代の人々が直感的に発見したものを、近代の人々は数式で表し、それによって今日の科学技術が成り立っています。しかし、

哲学や科学によって発見された「ロゴス」には人格はありません。その「ロゴス」は人と人格的な関わりを持つことはできません。

しかし、人格のないものからどうして人格を持つ人間が生まれたのでしょうか。哲学はそれに見えることができませぬ。聖書だけが、この世界を造り、普遍の原理で動かしておられるのは、心のない「ロゴス」ではなく、命を持つ人格であるキリストであると言つて、その問いに答えています。「この方にはいのちがあつた。このいのちは人の光であつた」という言葉は、混沌と暗黒の世界に神が光を与えた創造の第一日を思い起こさせます。神は、御子をまことの光として世に送り、人々に命を与えてくださったのです。

祈り 主よ。あなたは命の光です。あなたによって罪の闇に死んでいた私たちは命を得ました。

彼は光ではなかった。ただ光について証しするために来たのである。(8)

ヨハネ1・6と8はバプテスマのヨハネに関する挿入です。「光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。∴すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた」と、5節から9節へと続けて読んだほうが分かりやすいように思われます。しかし、聖書は、光であるキリストが来られる前にバプテスマのヨハネが光を証ししたことを述べています。それはヨハネの福音書に限らず、マタイ、マルコ、ルカも同じです。バプテスマのヨハネの証言はキリストの生涯と働き、また、教えと切り離せないものとして記されています。イエスもまたバプテスマのヨハネについて「ヨハネは燃えて輝くともしびであり、あなたがたはしばらくの間、その光の中で大いに

喜ぼうとしました」(ヨハネ5・35)と言っています。キリストはヨハネの証しなしには世においてならなかったのです。

まことの光であるキリストを信じる者は「光の子ども」(ヨハネ12・36)となります。以前は闇であつた者が、キリストにあつて「光」とされるのです(エペソ5・8)。世界の創造において、太陽、月、星が地上を照らし、光と闇を区別するものとなつたように、信仰者はまことの光であるキリストの光によつて世を照らし、光と闇の違いを示して、人々を光へと招くのです。キリストは、ご自分を証しする者を通して救いのみわざを成し遂げ、成し続けられるのです。祈り 主よ。多くの人々が光であるあなたを信じることができるよう、私たちの証しを用いてください。

この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。(13)

ユダヤの人々にとって「アブラハムの子」であることはとても重要なことで、その血筋を継ぐことが救いの条件であると考えられていました。救われるべき者たちがそうであるなら、救い主はおのことで、彼は「アブラハムの子」であるばかりか「ダビデの子」でもなければなりませんでした。マタイはイエスが、まさに「アブラハムの子」であり、「ダビデの子」であることを、その福音書の第一章で示しています。

しかし、救い主がアブラハムの子、イスラエルの子孫として来られた後は、救われるべき人はイスラエルの子孫である必要が無くなりました。ユダヤ人としての血筋はもはや問われなくなったの

です。主なる神は、かつて、モーセのもとで、イスラエルに対して彼らの神となり、彼らは神の民となるという契約を立てられました。今は、その契約に無縁な者のために、キリストを信じる者の神となり、キリストを信じる者を神の民とするという新しい契約を立てておられるのです。キリストにあつて、神は信じる者の父となり、信じる者は神の子ともなるのです。それが、「血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によつてもなく、ただ、神によつて生まれたのである」という言葉で言い表されていることです。

このような救いが、今、私たちのものとなっていることは、私たちがどんなに感謝しても感謝しきれないことです。

祈り 主よ。あなたが与えてくださった「神の子どもとなる特権」を感謝します。

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。(14)

ヨハネ1・14は、クリスマスの出来事を一言で言い表しています。何者にも制限されることのない永遠の神が、人となって時間と空間の中に入って来られた。それがクリスマスの出来事です。

「私たちはこの方の栄光を見た」とありますが、人となられた神の栄光はどこに見られたのでしょうか。御子は、家畜小屋で生まれ、家畜の餌を入れる場所に寝かせられました。栄光からほど遠い、人間としての尊厳すら認められない姿で、御子は、その人生の第一日を始めています。そして、その生涯の終わりは、呪いと恥の極みである十字架の上でした。キリストのご生涯のどこに栄光が見られるのでしょうか。

しかし、キリストに従った弟子たちは「私たち

はこの方の栄光を見た」と証言しています。弟子たちはキリストの栄光を奇蹟のうちに(ヨハネ2・11)、変貌のうちに(ルカ9・28〜36、第二ペテロ1・16〜18)、復活と昇天のうちに(第一テモテ3・16)見ました。キリストご自身の内にある栄光を理解する時、その貧しい生活も、苦難の十字架もまた、キリストの栄光の現われであったことが分かってきます。

今日の私たちも、キリストとの霊的なまじわりの中で「イエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜び」(第一ペテロ1・8)を体験し、その栄光を見ることができるのです。

祈り 主よ。私たちもあなたの栄光を見て、喜び躍る者となれますように。

いまだかつて神を見た者はいない。父のふとこ
ろにおられるひとり子の神が、神を説き明かさ
れたのである。(18)

御使いがマリアに「それゆえ、生まれる子は聖
なる者、神の子と呼ばれます」(ルカ1・35)と
告げたように、イエスは「神の子」と呼ばれてい
ます。イエスが神の子であることは悪霊たちでさ
え知っていました(ルカ4・41)。弟子たちは
「まことに、あなたは神の子です」と言つて、イ
エスを礼拝し(マタイ14・33)、ペテロはイエス
に向かつて「あなたは生ける神の子キリストで
す」(マタイ16・16)と告白しました。

また、キリストは「神のひとり子」(ヨハネ
3・18)とも呼ばれています。「神の子」という
言葉はキリストを指す以外にも使われますが、
「神のひとり子」という呼び名はキリストにし

使われません。「ひとり子」という呼び名は、父
なる神はひとりの御子だけをお持ちになり、イエ
ス・キリスト以外に、本来の意味での神の御子は
おられないということを教えています。

さらに聖書は、キリストを「神のひとり子」と
呼ぶだけでなく、「ひとり子の神」とも呼んでい
ます。キリストを「神のひとり子」と呼んだとし
ても、「神に造られた最初の存在」、あるいは、
「神にまで高められた人物」などと考える人々が
あつたため、キリストが「神」であり、「子なる
神」であると言う必要があつたからです。救いは
イエス・キリストを「神の子」、
「神のひとり子」、さらには「ひとり子の神」と告白すること
の中にあるのです。

祈り 主よ。あなたこそ、ひとり子の神です。私
はあなたを信じます。

『日々の聖句』の使い方

この冊子は聖書を読み、学び、黙想するための手引で、独立した読み物ではありません。かならず、聖書を開いてその日の箇所を読み、参照箇所も開くようにしてください。

聖書の黙想には、古代から「レクシオ・デヴィナ」という方法が用いられました。それは次の四つの段階を進んで聖書を読む方法です。英語の四つの「R」を意識するとよいでしょう。

一、読む (Read) 心を静めてゆっくりと、何回でも、聖書を読みます。聖書は、神の言葉ですから、神が語っておられる声を聞くようにして読みます。

二、黙想する (Reflect) 黙想は聖書との対話です。聖書になぜこのような言葉が書かれているのだろうか。それが自分にとってどんな意味があるのか、聖書に問

い、聖書に答えてもらおうようにして、その箇所の中心的な部分を思い巡らします。

三、祈る (Respond) この祈りは、黙想によって得られたことに対する応答の祈りです。それは悔い改めや行動に結びつく決心であるかもしれませんが、あるいは、まだ解けなかつた疑問や解決していかないことがらに対するさらなる求めであるかもしれません。それがどんなものであっても、正直に祈ることが大切です。

四、瞑想する (Remain) 祈りに続いて、しばらくの間、神とのまじわりに留まりましょう。「黙想」は「聖書との対話」ですが、「瞑想」は「神との対話」です。神の臨在の中にとどまることによって、御言葉が血肉となり、祈りが生活の中で実現していきます。「瞑想する」ことは神とのまじわりに「留まり」、自分自身を神の手に「委ねる」ことと言い換えることもできます。



Penguin Club

www.penguinclub.net